

中北.com

地域教育情報紙

中北教育事務所
地域教育支援スタッフ

11月
増刊号

TEL 0551-23-3008

FAX 0551-23-3013

チユウホク ドット コム

中北の地域社会 (COMmunity)の心の交流 (COMmunication)をめざします

峡中地区・峡北地区合同 地域教育フォーラム

開催されました

平成22年度の峡中地区・峡北地区合同地域教育フォーラムが、10月26日(火)に日本航空学園内J-shipホールで開催されました。約400名の方々のご参加を得て、シンポジウムを中心に展開されました。シンポジウムでは、まず3名の方から地域の教育活動あるいは最近の教育の動向について発表をしていただきました。ついで発表者3名が壇上に上がり、一般参加者も交えたディスカッションが行なわれました。以下、そのあらましをお伝えします。

発表1 「みなさんも始めませんか? 『おやじの会』」

堀内伸浩氏(長坂小学校おやじの会事務局)



4年前の発足以来活動を続けてきた北杜市立長坂小学校の「おやじの会」の発表です。同会は、父親も学校に関わってほしいという同校前校長先生の考え、退任後も学校に関わりながら世代を超え

たつながりをつくりたいというPTA役員経験者の考え、また学校を取り巻く地域の関係者がつながりをつくりたいという考えがもとになって

発足したとのことです。「総合的な学習の時間」の環境学習も兼ねた環境美化の看板設置、校庭の老木の伐採と新たな植樹、卒業祝いの餅つき等々の活動が紹介されましたが、いずれも会員の皆さんが楽しみながら活動している様子でした。

「出来る者が、出来る時に、出来ることをする」を会則として無理のない活動を続けてこれ、現在は地域の30歳代から70歳代までの幅広い世代の方々を会員として擁しているとのことです。学校・家庭・地域が、地域の自発的な行動により結ばれることで子どもたちの教育環境が整えられていく好個の例が示していました。

発表2 「家庭は生みの親、地域は育ての親」

関敦隆氏(子ども自然体験クラブ「エヴォルヴ」代表)



子ども自然体験クラブ「エヴォルヴ」は、小学校5・6年生がイカダ下りをしたことに始まるそうです。そこへ問題が多発していた地元の中学校の生徒もイカダ下りに興味を示して参加してきました。以来、関氏は問題

を抱えた子どもも含めて多くの子どもの成長を見てきました。

関氏は、「子どもは、おとなが特に手をかけなくても集団の遊びの中で成長していくものです。子どもたちは、クラブなどの異年齢の子どもが集まる集団の中で、自分たちで考えてルールをつく

るなどして社会の中で折り合いをつけて生きていくことを学びます。・・・ところが、家族や環境が本来の機能を失い子どもの成長のシステムが壊れてしまっ様々な問題が生じているのです」と言われます。「教員には転任などがあり子どもの成長を断片的にしか見ることが出来ません。しかし、地域のおとなは長期にわたり子どもの成長を見守ることが出来ます」とも言われます。

関氏のクラブの運営は、地域のおとなとして子どもに活動場所を提供するものでした。現在では、同クラブは放課後子ども教室、放課後児童クラブとしての活動も行なっています。「地域で取り組む教育の推進」を実践してこられた人ならではの話をうかがうことが出来た発表でした。

発表3 「今問われる新しい『公共』とは何か ～中北地区の学校・家庭・地域の連携を考える～」
堀井啓幸氏(山梨県立大学人間福祉学部教授)



「新しい『公共』」について語られることが多くなっています。それは市民の自発的な行動によって担われるものであり、地域教育や社会教育にも繋がっていくものです。堀井氏はそうした動きと学校教育との関係について

いくつかの例を示されました。

文部科学省の「学校支援地域本部事業」(山梨県では「やまなし学校応援団育成事業」)では、地域の方々が学校支援ボランティアとして学校教育に協力することが期待されています。

社会教育で学校施設を利用した場合には学校施設の「目的外使用」とされますが、それは学校教育と社会教育の繋がりが必ずしもよくないことを示しています。

地域・家庭が持っていた子どもを育成する機能が縮小してきています。それにともない学校教育には様々な新たな問題が起こってきました。「全

国学力・学習状況調査」で、学校では学びにくい生活に即した内容を問うB問題の得点の低さが問題になっています。子どもたちの地域・家庭での体験が減少する中でこのことです。

学校評価が法制化され、学校は地域の人々の意見や要望を取り込んだ運営が求められています。これは学校にとって大きな課題となっています。

堀井氏は、最後に、住民の自治的社会教育としての公民館活動を構想した寺中作雄の言葉を取りあげられました。寺中は、公民館の「公民」を「自己と社会との関係についての正しい自覚を持ち、自己の人間としての価値を重んずるとともに、一身の利害を超越して、相互の助け合いによって公共社会の完成のために尽くすような人格を持った人、またはそのような人格たらんことを求めて努力する人」と規定しました。これからの「新しい『公共』」の時代に、人々が教育にどうかかわるかを考える上で示唆するところが多い言葉です。

現在の教育の問題点を確認し、これからを考える方向性を示した発表でした。

ディスカッション

ディスカッションに入る前に発表の補足がありました。堀内氏から長坂小学校発祥の経緯について説明がありました。子どもの遠距離通学に悩んでいた地域が、小学校の分離独立のために全戸からの寄付で校舎建設資金をつくり、労働奉仕で校地を整備したそうです。おやじの会を上まわる先人の教育への志があったとのこと。関氏からは学校運営には校長権限の強化が必要ではないかとの発言がありました。堀井氏からは、関氏の指摘の方向に制度変更がされつつあること、また東京都などでは学校ボランティアが採点などにまで入っているとの説明がありました。

この後、フロアーの参加者も交えたディスカッションに移りました。まず、PTA活動の広がりや継続性の方途についての質問がありました。それに対して、関氏は「地域がPTAの役割を果たす、例えば育成会に保護者と学校がかかわりPTAの役割も持ったらどうだろうか」、堀内氏は「おやじの会も地域とPTAを繋ぐ架け橋」とそれぞれ発言されました。

地域行事などで子どもの参加状況の悪さや怪我を必要以上に恐れることには保護者の無理解があるとの発言がありました。これに対して関氏は、企画を子どもに任せることで参加状況がよくなっている実態、また怪我は自己責任とする原則を徹底するとともに行事では保護者から必ず同意書をとっていることが説明されました。堀内氏から「PTAは親の成長の機会です。おやじの会は自分が教育される場でした」と述べられ、保護者の積極的な関わりを呼びかける考えを示されました。

父権が重要であること、その弱体化を危惧するという発言が出ました。これに対して、女性から、母親の父親に対する姿勢が重要ではないかとの意見が出されました。

活発な意見が次々と出始めたところで終了予定時刻になってしまったのは残念でした。しかし、今後さらに一層活発な交流が望めそうな雰囲気があるシンポジウムでした。

平成22年度『中北.com』11月増刊号

編集・発行

中北教育事務所地域教育支援スタッフ

〒407-0024 韮崎市本町4-2-4

電話 0551-23-3008

ファックス 0551-23-3013

『中北.com』は中北教育事務所のホームページでもご覧いただけます。

アドレスは次のとおりです。 <http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ch/index.html>